

筑後川のめぐみに感謝して 両筑平野用水管理開始50周年



筑後川は、熊本、大分、福岡及び佐賀の4県にまたがる幹川流路延長143km、流域面積2,860km²の九州最大の河川です。筑後川は古くからかんがい、舟運などにより地域経済に寄与するのみならず、数多くの農業水利に関する歴史的建造物などがあります。反面、数多くの水害をもたらす暴れ川であり、筑後川の歴史は洪水との闘いでもありました。また、筑後川は国内最大の干満差を有し広大な干潟が形成されている有明海に注いでおり、有明海では多様な漁業が営まれてきました。

第二次大戦後、北部九州の社会、経済発展は各種の利水需要を急増させ、また、農業用水の安定供給も課題となり、水資源開発は喫緊の課題となりました。昭和39年10月に筑後川は水資源開発促進法に基づき利根川、淀川に次いで全国で3番目となる水資源開発水系に指定されて総合的な水資源開発がはじまり、水源地域の方々のみならず、中下流域や有明海の関係者の方々を含めたたくさんの方々のコンセンサスを

ることによって事業が進められてきました。

水資源開発基本計画(フルプラン)に位置づけられた事業を進めていく最中においても、昭和53年、そして平成6年には計画を上回る規模の大洪水が発生し、私たちの暮らしだけでなく農業や漁業など各方面に大きな影響を及ぼしました。水を利用される皆様の節水意識の高揚と節水行動、筑後川水系における水資源開発と福岡導水による導水が効果を発揮しました。平成6年洪水以降も水資源開発は進められ、小石原川ダムに1,870万m³の洪水対策容量を持つに至っています。

このような水資源開発の歴史を持つ筑後川水系ですが、今年、筑後川水系の第1号事業である江川ダムを水源とする両筑平野用水事業の管理開始から50年、利水の要でもある筑後大堰の管理開始から40年を迎える記念の年を迎えました。事業に協力いただいたみなさまに感謝をしながら事業の足跡を振り返ります。

両筑平野用水事業の特徴

筑後川流域の北部に位置する両筑平野は、かんがい用水の不足に苦しみ、多くの浅井戸などからの補給により、稲作を行ってきました。また、福岡市や朝倉市(旧甘木市)も長い間、都市用水の水不足に悩まされてきました。

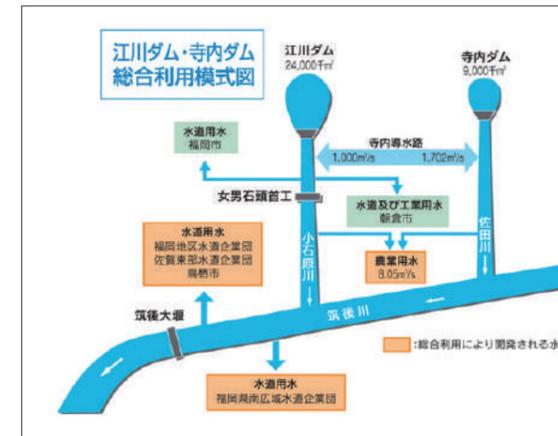
両筑平野用水事業は、こうした水不足を解消するため計画され、昭和41年の筑後川水系水資源開発基本計画の策定、昭和42年の事業実施計画認可の後、農林省から水資源機構(当時、水資源開発公団)が承継した筑後川水系における最初の

水資源開発事業です。この事業では、小石原川において、水源施設である江川ダム(有効貯水量2,400万m³、利水専用)、小石原川と佐田川を結ぶ導水路、取水施設である女男石頭首工、幹支線水路(農業専用施設)などの施設を整備しました。

一方、佐田川には昭和45年の「フルプラン」変更により、洪水調節や不特定用水の確保も事業目的とした寺内ダムが建設され、江川・寺内ダムの総合利用による水資源の有効活用が図られています。

また、平成17年度から29年度にかけて、老朽化した施設の改築・更新、配水の実態を踏まえた施設の改良や水管理システムの導入を行うことを目的とした「両筑平野用水二期事業」を完工したところです。

両筑平野用水事業のあゆみや管理の詳細については、ホームページをご覧ください。



江川ダム

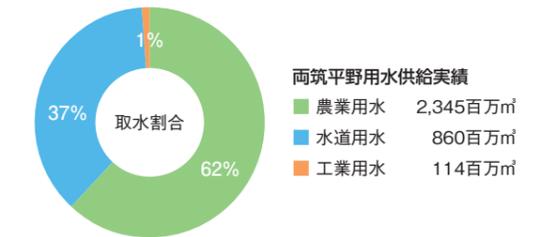


女男石頭首工

事業の実績

両筑平野用水事業は、昭和50年の管理開始から半世紀、昭和53年の「福岡大洪水」、平成6年の「平成大洪水」など、地域の協力を得ながら多くの困難を乗り越え、農業用水や水道用水及び工業用水を安定的に供給してきました。

累計取水量は約33億m³にのぼり、両筑平野用水地域を潤し続け、地域社会の発展に貢献しています。



事務所の活動

筑後川上流総合管理所では、利水者や地域のみならずによる上下流交流や水源地域への感謝行事に参加しています。

(1) 江川水源祭

「上秋月湖」の名前で地域の方々に親しまれている江川ダムですが、毎年6月にダムの建設に協力いただいた方々への感謝の意を表すとともに、施設の安全と豊水を祈願するための「江川水源祭」を開催しています。水源祭へは、朝倉市長をはじめ、農業用水・水道用水・工業用水の関係機関の代表者などが参加されており、水源である江川ダムへの感謝と豊かな水資源への思いを一つにしています。



(2) ウォーターフェスティバル

7月21日(海の日)、あまぎ水の文化村(朝倉市)が主催するイベント「ウォーターフェスティバル」の開催と合わせて、管理開始50周年記念イベントとして、江川ダム施設見学会を実施

しました。また、甘木漁業協同組合、福岡地区水道企業団の協力・協賛を受け、ダム下流の小石原川へのアユ稚魚の放流体験を合わせて実施し、当日は約50名が参加しました。



江川ダム施設見学会の様子



両筑平野用水管理開始50周年

両筑平野用水管理開始50周年にあたり、各種イベント等で、ダムで移転された5つの集落のかつての暮らしを紹介する写真展示を行っています。



また、ダム建設当時の状況などを振り返り、かつての江川谷の風景や人々の営みに思いを馳せ、豊かな水を供給してくれる水源地への感謝の気持ちを改めて共有するために特設サイトを設けており、50周年事業についてもご案内しています。



<https://www.water.go.jp/chikugo/chikuiyo/ryochiku50/index.html>



このほか、多くの方々に両筑平野用水事業のほか水源地域のことを知っていただく様々な取組を行いました。

江川ダム50周年ポスターの貼り出し

江川ダム管理開始50周年のポスターを作成し、関係機関の協力を得て、利水機関の事務所や朝倉市内の公共施設、地元鉄道沿線駅等に貼り出し、江川ダムや水源地朝倉をPRしました。

ラジオ放送への出演

ポスターの広報効果もあり、ラジオ番組(RKB毎日放送)の「私達50歳です」という企画に管理開始50周年の江川ダムが取り上げられ、職員が生出演して江川ダムを紹介しました。

上秋月湖水源の森づくり事業

令和7年11月30日(日)、朝倉市と福岡市による上下流交流事業「上秋月湖水源の森づくり事業」の一環で、管理開始50周年記念として江川ダム施設見学会を実施し、福岡市民及び朝倉市民の約70名に参加いただきました。

筑後川のみぐみフェスティバル

令和7年10月18日(土)、19日(日)、福岡市役所広場で開催された「筑後川のみぐみフェスティバル」に出展しパネル展示を行ったほか、江川ダム現地中継(ラジオとの3元中継)が行われ50周年を迎えたことを広く伝えました。

関係機関広報誌への掲載

朝倉市「広報あさくら」、福岡地区水道企業団「ふくすいき～福水企通信～」に江川ダム50周年紹介記事を掲載していただきました。

今後の展望

両筑平野用水事業は、多くの先人たちの努力に支えられ、用水の安定供給を実現してきました。

しかし、近年は、気候変動の影響により、ひとたび雨が降れば豪雨となり、その後は雨が降らずに渇水が長期間続く状況

が顕在化してきています。

このような新たな課題に対し、江川ダム、寺内ダムに、令和2年度に管理を開始した小石原川ダムを加えた、3ダムの総合的な運用により、水資源の更なる効果的な活用を図る取り組みを進めています。

コラム column

両筑平野用水管理開始50周年記念式典



両筑平野用水事業は、筑後川で最初の水資源開発事業であるとともに、その事業実施においては朝倉市、小郡市、筑前町及び大刀洗町にも多大な協力をいただいていた実施したものです。

水源である江川ダムの管理開始50年を踏まえ、これまでの歩みを振り返り地域の皆様への感謝の気持ちを新たにするとともに、地域の皆様と将来に向けた展望を描く機会とする記念式典を令和7年12月7日(日)に旧甘木・朝倉市町村会館 希声館(福岡県朝倉市甘木)にて開催しました。

式典には、事業関係者など約100名が参加しました。式典では、地元選出の国会議員などの来賓の皆様より祝辞をいただき、事業の実績のみならず地域の方々への感謝の言葉が述べられました。

また、式典では江川ダムの建設により水没した地域を写したスライドが上映されたほか、秋月小学校児童により閉校した旧江川小学校の校歌が斉唱されました。

さらに、松岡両筑土地改良区理事長と光山福岡市副市長より未来へのメッセージとして、式典を契機に水源地域への感謝や水の重要性などを後世に引き継いでいきたいと述べられました。

未来へのメッセージを受けて仲道筑後川局長は、「これからの管理に向けて」として「これまでの経験をいかして歩みを進めていく」と述べ、式典を締めくくりました。



富田副理事長挨拶



秋月小学校児童による旧江川小学校歌唱

